

書評

## 内田義彦『資本論の世界』

岡崎栄松

ここでとりあげようとする内田義彦教授の新著『資本論の

場からの斬新な主張や鋭い考察が、いたるところにちりばめ

られているからである。

世界』（岩波新書、一九六六年十一月）は、その「あとがき」

では、著者独自の立場とはどのようなものであろうか？

によると、一昨年七月、教授がN・H・Kの求めに応じて十

回にわたる経済学の放送講義をされたときの録音テープをも

とに書かれたということである。だからこの本は、平明で生

々とした話し言葉で書かれており、また多くの適切な日常的

事例が挿入されていて、この種の書物としては非常に読みや

すいものとなっている。

しかしこの本は、たんなる経済学入門の書、たんなる『資

本論』解説の書ではない。というのは、本書には著者独自の  
「あとがき」にはつぎのような文章がみいだされる。

「ぼくは、長いこと経済学の世界にはいることができ  
なかつた。ぼくは、経済学は人間の学問だとおもつてい  
た。そして、人間の問題をほんとうに解決するためには、  
立場が首尾一貫的につらぬかれており、そして、そうした立

いろいろの問題を経済学の領域にひきしほってゆかねばならないとおもつた。そして経済学を専攻することに始めたのである。しかし、専門の学問として経済学をやつてゆくうちに、ぼくはしだいにいらだしさを感じはじめた。ぼくが経済学の世界にはいつてているとき、ぼくの眼に人間は見え、そして、ぼくが人間と接触しているとき、ぼくは自分が経済学者ではなくなっているということに気づいたのである。しかも、ぼくは『資本論』を勉強していたのであるが、それは、ぼくの人間を見る眼にはすこしもなつていなかつた。また、ぼくは、経済学は社会諸科学の基礎たるべきものであることを知つてはいたが、しかし、ぼくは、友人の社会学者、歴史学者、法学者あるいは文学者と接しているとき、かれらが出してゐる問題の解決に指針をあたえるどころか、それを経済学の言葉にほんやくすることすら、まったくできなかつたのである。

「しかも、ぼくはそういう人々との接触のなかで、実体としての社会の存在を次第に感覚的に把握しうるようになつたのであるが、同時に、ぼくは、そこにイギリス経験論的なものの見方が秘かにほりこんでくることを意識しはじめた。ぼくは、それを大事なこととおもい、そういう問題をもつて改めて『資本論』と古典経済学を研究しはじめたのである」（『経済学の生誕』三三三一三

二四ページ）。

ところで、本書『資本論の世界』はつきの六つの章からなつてゐる。——「I マルクスを見る眼」、「II 『資本論』以前の問題」、「III スミスの世界とマルクスの世界」、「IV 労働と疎外」、「V 相対的剩余価値の論理」、「VI 資本と人間の再生産」。そして、これらの章をつうじて著者の追求する中心テーマは、著者自身によつてつきのよう語られている。——

「人間にとって資本主義は何を意味するか。そして、この、『人間にとって資本主義は何を意味するか』を考えてゆく上に、経済学という学問は、いつたい、いかにして、いかなる意味を持ちうるのであらうか。このことを私は長らく考えつづけてきたが、この本で正面から取り上げることになった。……『資本論』を使ってみるとことによって、あるいは究極的に『資本論』体系といふ形を取らざるをえなかつたマルクスの思想の歩みを追いかけることによつて、資本主義の現実そのものがどう見えてくるか。これが貫して私の追求したことである」（二二二ページ）。

内田義彦『資本論の世界』（岡崎）

内田教授のこうしたテーマは、いままでもなく、初期マルクスと『資本論』のマルクスとの関連という問題に深いかか

一一三（一〇三）

わりをもつてゐる。しかし教授は、初期マルクスから『資本論』への発展のあとを直接に問題にするという手法はむしろしおけられる。というのは、教授の考えでは、「思想の燃焼過程をとらえないかぎり、思想の歴史は——ちょうど小説の筋書きみたいなもので——あまり意味をもたない」（一九ページ）からである。そこで教授は、「人間の学問」としてのマルクスの思想が、ある意味ではもつとも鮮明に出でている『経済学・哲学草稿』ではなく、いきなり『資本論』をとりあげ、「それも筋書きを追うという形ではなくて、ところどころの章を使いながら、その限りで、人間と社会がどうみえるかをためしてみる、といったことから始め、漸次かれの体系を見る」（一九ページ）、そしてその間に必要なかぎり初期からの発展をみる、という方法を採られるわけである。

以下、私は、本書の各章での基本的な主張を、できるだけ教授の所説に即して紹介し、かつ若干のコメントを付記してゆくことにしよう。

## 二

第一章「マルクスを見る眼」では、さいきんのわが国思想界における「疎外論ブーム」と「明治ブーム」の風潮に言及しながら、およそ上記のような本書のねらいと方法が説明されるが、そのさい著者は、このごろは「思想論ばやり」で、「疎外」ということがよくいわれており、マルクスについての関心も『資本論』よりはむしろ疎外論のほうに移っているとして、「疎外論ブーム」の功罪といったものを論じておられる。すなわち、初期マルクス（とくに『経哲草稿』）の研究は、若きマルクスがその学問をイギリス流の「経済的人間」への反感から出発させている点を明らかにすることにより、「利己心むき出しの人間をそのまま認めるのが唯物論だとうような、とんでもない誤解とマルクスの経済学なり社会主義をむすびつけて毛ぎらいしている」（六ページ）人々——著者はその一例として初期の河上博士をひきあいにだされると、その愚かしさを示したかぎりで、重要な役割をはたしたといえる。それはまた、『経哲草稿』その他における問題の立て方や方法を追思惟することにより、『資本論』での「搾取」概念の二重性——人間が自然に働きかけて成果を得るという意味での「搾取」と、その成果が財産所有者にとられて、働くいた人に対立しているという意味での「搾取」と——を明確にした点でも、有効であったといってよい。だが、著者によ

れば、「『資本論』ではなく、初期マルクスという形で、研究がすすめられた点にそもそも問題がある」（一七ページ、力点一内田教授、以下同じ）のであって、さいきんの疎外論では、第一に、「物質的貧困と精神の貧困を、同時に、私有財産制度の問題として、とらえるという初期マルクスのそもそももの問題がとらえられない」（同上）し、さらに第二に、「この問題をとらえるための『人間と自然との物質代謝過程』という概念が十分なひろがりをもってとらえられない」（同上）。そして「こうした、マルクスの疎外論の精神と概念が忘れられて、思想論づームの形で、『経哲草稿』のマルクスだけが抽出されてしまふ人間学的な部分だけが、もっぱら思想史的に研究されている」（一八ページ）点に、著者はさいきんの疎外論の主要な欠陥をみられるわけである。

初期マルクスの研究についてのこうした所論は、けだし当を得たものということができよう。ただ著者が、わが国ではさいきん「一方で、『資本論』から疎外論へ、他方で、マルクスから明治へと思想的関心が移っている」（四ページ）といわれるさいには、私には、いさざか「疎外論」と「明治」への過大評価があるように思われるのだが、どうであろうか。

なお第一章のおわりには、「マルクスを見る眼」と「日本を見る眼」を交錯させるために、マルクスの思想的発展のあとをたどる年表と、明治国家成立にいたるまでの日本をめぐる列強の動きを示す年表とが対比されているが、この二重映しの年表は大へん興味ぶかいものになっている。

ところで著者は、第二章「『資本論』以前の問題」のはじめの部分で、こう述べられる。

「問題は、マルクスの体系は、こうだではなくて、なぜマルクスはこういう方法をとっているかであります。それには一つ、分析の対象である資本主義そのものの、従来の社会とは違った独自の性格があるだろう。今一つには、窮屈的にそういう体系的な方法にまでマルクスを導いていったマルクスの眼があるだろう。研究の対象である資本主義社会と、それを把えようとするマルクスの間に、緊張をはらんで成立するのが『資本論の世界』でありますから、その間の関係を明らかにしないかぎり、『資本論』の説明は『資本論』の筋書に終つてしまふ。

「そういう、頭で追った『資本論』の筋書といったものとなり終らないために、『資本論』そのものに入る前に、まず、

今日明日は、こうした独自なやり方でマルクスが分析を進めてしまふとしている資本主義社会そのものについて、ついで、それをみるマルクスの視角について、いろんな角度からスポットを当てて、問題を掘りおこしておきたいと思います」（三五—三六ページ）。

こうして第二章「『資本論』以前の問題」では、マルクスにとっての分析の対象である資本主義社会そのものが、従来の諸社会にたいしてどういう独自性をもつているかが考察され、さらに第三章「スマスの世界とマルクスの世界」では、対象＝資本主義社会をみるマルクスの視角がスマスの場合との対比において明らかにされる。

では、資本主義社会の独自性にかんする著者の見解はどのようなものであろうか？それは、およそつきのようによく要約できよう。——（）資本主義社会は、私有財産制度を基礎とする社会の一種であるが、これまでの社会とはちがって、そこでは「生産の基底である労働力と生産手段」までが商品となり、この労働力と生産手段が「商品の論理」にしたがって結合される。〔〕このように「商品の論理」が貫徹するということは、人格的な支配・服従の関係（「経済外的な結合力」）が作

用しなくなり労働者が自分の労働力にたいする完全な处分権をもつということを意味するが、しかしメダルには裏があるて、他方ではそれは、人間がますます完全に商品になるということを意味する。（）資本主義社会では、こうした独自な近代的所有に媒介されて生産力が飛躍的に発展しており、それが「老大な——まつたく老大な——商品群」となつてあらわれている。

第二章では、これらの点が身近な具体的な事例に即して実に巧みに説明されているのだが、わけても「価値論が問題となる問題状況」——「経済外的な結合力」が消滅して「商品の論理」が貫徹するにいたるプロセス——についての例解は卓抜である。

つづいて第三章「スマスの世界とマルクスの世界」では、著者はまず、スマスにあっては資本主義のもとでの老大な生産力の根因が、交換にもとづく「結合労働」に求められていくこと、そしてそれをスマスは、私的所有が純化すればするほど労働の社会的結合が進展するというテーマにまとめあげたことを詳説されたのち、さらにすんで、スマスとマルクスの場合の「問題的関心のちがい」を問題にされて、こう述

べられる。——「どちらの場合も、階級的搾取と分業による社会的生産力の発展という二つの事がらが、文明社会の特質として取出されておりますが、その同じことの取出し方がちがう。スマスの場合は、階級的搾取にもかかわらず、富裕が一般化するのはなぜかというかたちで、分業による社会的生産力という事実が取出されておりますし、マルクスの場合には、社会的生産力の発展がなぜ貧困や恐慌を生むというかたちで、発展するかという問題提起から、資本主義に独自な生産様式の研究が行なわれているので、ちょうど逆です」（五八ページ）。

スマスとマルクスの場合のこうした「問題的関心のちがい」——あるいは「問題の理論への送りこみ方の違い」——は、しかし著者によれば、両者の歴史観のちがいにもとづいている。そこで著者は、資本主義社会という独自な私有財産制度に立脚する社会が歴史の流れのなかでどう位置づけられているかを、スマスとマルクスの場合について明らかにされる。すなわち、スマスの場合には、資本主義社会が「自然的な社会」——そこでは社会的生産力と人間の自由との双方が全面的に解放されてくる——としてとらえられており、そしてスマス

はこうした資本主義社会像によって従来の歴史を整理したのであって、そのため彼の描く歴史は資本主義にむかへて無限に発展していくという姿をとる。これに反してマルクスは資本主義社会を、人類の長い歴史のうち、人間が人間として自由に歴史をつくる社会にいたる前、すなわち人類の前史のさいこの段階として位置づけるが、この場合、「前史のさいごの段階」ということのうちには、資本主義も要するに私有財産制度の一形態にすぎず、人間にたいする財産の支配などということと、同じ私有財産制度といつても資本主義は——生産力を飛躍的に発展させる点で——「今までの社会とは断然ちがつた特色」をもつているとということと、この二つの意味がこめられている。そしてマルクスにおいては、こうした資本主義の「ネガティヴな面」と「ポジティブな面」とがそれぞれ強く押し出されたうえで「矛盾」としてつかまれている。なおまた著者は、スマスとマルクスの場合のこうした歴史観のちがいは、それ自身、「賃労働者」という、資本主義社会に独自な直接生産者の、まったく独自な性格を、どこで、どうつかまえるかにかかっているとして、こう指摘されてゐる。——スマスにおいては「土地、資本、労働の所有者が、

それぞれ、一人一人、階級の間でも各階級の内部でも、なんらの特權なく完全にひらの所有者として自由に自分の財産を交換しあう」（六八一六九ページ）ものと解されており、こうして「人間が商品になつていてるという事実は無視されて、人間が自由に労働を処分する、その自由が保証されているのが資本主義だと考えられている」（七八ページ）。これに反してマルクスの場合には、「労働力」範疇の定立をつうじて、労働力の処分能力を一〇〇%もつということは労働の処分能力を一〇〇%失うことと表裏の関係にある点が解明され、こうして「人間が商品になつていてるという事実」が前面に押しだされている、と。

## III

さて、マルクスの「資本主義を見る眼」をスマスとの対比のうちで論定された著者は、第四章「労働と疎外」からは、いよいよ読者を「資本論の世界」へと案内される。その新しい著者は、「私の話では、……スマスにはじまるブルジョア経済学の生産過程論との対比という点に重点をおいて、一方で『資本論』の一部一三部という特異な構想を、また、第一編での価値法則が資本制生産過程の分析にどう生かされ

てくるか、ということを念頭におきながら、直接には、本来の資本制生産過程が論じられる第一部三編以後に話を限りたい」（一二三ページ）とされる。つまり著者は、「資本論の世界」を論ずるにあたつて、その考察の視野をもっぱら剩余価値論と資本蓄積論とに限定されるわけである。

ところで内田教授は、マルクスの剩余価値論については従来、三つのタイプの解釈がおこなわれてきたと主張される。  
 (一)「生産関係主義の『資本論』理解」(二)「マルクスの人間学的理説」、および(三)「『資本論』の生産力論的理説」がそれである。いま、この点についての教授の所説を引用しておけば、こうである。

「まず、第一に、剩余価値の生産過程を価値増殖過程として（のみ）みる見解があります。使用価値視点がなく労働過程論やその具体化としての相対的剩余価値論が社会的物質代謝過程の問題として十分な重さをもつてうけとられていないので、生産関係主義の『資本論』理解あるいは絶対的剩余価値の論理段階の『資本論』理解と名づけておきます。これがマルクス経済学の『経済原論的』理解としては、もつとも古典的なものでしょう。まさに『資本論』といえば『ああ、あ

れ』かといわれるくらい常識化されているといいましたが、その常識の底にあるのは、こういう価値論＝剩余価値論的な『資本論』理解だといっていい。

「第二に、この常識とそれちがつた形であるのが疎外論のマルクス理解でありまして、労働過程論の——それも一部——が生産力という概念や価値概念ときり離されてとりだされて、貨幣論と結びつけられながら初期マルクスにつながっている。マルクスの人間学的理説と名づけておきます。

「第三に、第一のものの裏返しの形で、相対的剩余価値の生産の所を絶対的剩余価値の生産の論理と切り離してマルクスを理解する見解があります。社会政策の方で大いに論争されたことですが、これは、資本主義の生産力的性格だけを前面におしだしている点で、また、階級闘争ではなくて、いかたちで生産力の展開それ自体を歴史の起動点としておしだしている点において、『資本論』の生産力論的理解といつていいかと思います。戦前からあつた第一の古典的解釈に対して、戦時中から戦後にかけて——歴史的順序からいえば——第三および第二の見解がてきて、三つ巴になつてゐるといふことがいえます」（一二六—一二七ページ）。

このように内田教授は、わが国の従来の『資本論』解釈を、(一)「生産関係主義の『資本論』理解」または「古典的解釈」、(二)「疎外論のマルクス理解」ないし「マルクスの人間学的理説」、(三)『『資本論』の生産力論的理説』という三つのタイプに分類されるわけである。そして教授は、これらの解釈は資本主義という独自な私有財産制度の、またそれをみるマルクスの分析視角や方法の一面を鮮明にとりだしている点でそれ

ぞれ有効なものだとされながらも、それらの解釈、ことに第一の「古典的解釈」と第二の「疎外論のマルクス理解」をつよく批判される。すなわち、「剩余価値の生産過程を価値増殖過程として(のみ)見る」「古典的解釈」にたいしては、教授は、労働過程論をぬきにしては、資本主義という独自な私有財産制度のもとで「人間と自然とのかかわりあいという根柢的に重要な事がら」がどうおこなわれるか、というマルクスの「問題的関心」が消えてしまふと論難される。他方、教授は、『資本論』のコンテクストを無視して、労働過程論を孤立的にぬきだして初期マルクスにつなぐと、『資本論』における「疎外」概念が初期マルクスのそれに解消され、『資本論』体系をつうじてはじめて展開される「成熟したマルク

スの世界」は消えうると力説される。そして教授自身は、マルクスの剩余価値論（および資本蓄積論）では、「歴史貫通的な〔つまり超歴史的な〕事項をみる使用価値＝生産力視点」と「資本主義に独自な発現形態をみる価値＝生産関係視点」とがつらぬかれており、しかもこの二つの視点は「決して切り離されて平行線をたどっているものではなく、人間と自然との物質代謝という歴史貫通的な事項、また、生産手段の所有者による剩余生産物の取得という階級社会貫通的な事項が、商品を富の基礎範疇とする資本主義ではどういう形態をとつてあらわれるかという視点で統一されている」（二七四ページ）と考えられるのである。

要するに、マルクスの剩余価値論＝資本蓄積論の理解にさしては使用価値＝生産力視点」と「価値＝生産関係視点」とを有機的な統一において堅持すべきだというのが教授自身の立場であり、そしてそうした立場が、「資本論の世界」を見るさいの教授の視座を形づくっているわけである。  
——（一）労働過程がどの歴史段階にも共通だということは、裏からいえば人間に独自だということであって、マルクスは意

識的に、ここで極端な抽象をやり、人類の歴史に貫通するものをとりだすことによって、ほかならぬ人間の物質代謝過程を他の生物のそれから明確に区別し、こうして特殊人間的な物質代謝過程の本質を描いているという点（ここから前出の「歴史貫通的」という著者独自の表現がでてくる）、（二）マルクスは人間の物質代謝過程——それには生産過程と消費過程がふくまれる——のうち生産過程を、人間生活におけるもつとも基底的なものとしているが、それは彼が、人間は労働によって自然をつくり変えるだけでなく、同時に自分自身をもつくり変える、と考えてのことだという点、（三）マルクスは、目的を定立して自分の目的にしたがって労働の過程を指揮する當みを精神労働、それに従つて神經や筋肉を動かす仕事を肉体労働と名づけるが、この精神労働と肉体労働は、独自な私有財産制度である資本主義社会——そこでは目的の定立が完全に資本のものになり全生産物が資本家の所有に帰する——では、もつとも完全かつ純粋な形で分化・対立することになる、という点。  
\* この最後の点との関連で、第四章にはつぎのよくな興味ぶかい指摘がある。——「男性と女性の「身体組織

それ自身の」ちがいがそのまま、現実の男性と女性の関係を規定しているのではないよう、労働の種類のちがいがそのまま、労働をしてあるいは精神労働たらしめ、あるいは肉体労働として嫌悪に価するものにしているのではない。同じ労働が好きになる場合があり、同じ労働が嫌いになる場合がある。廻り道があります。芸術家や学者の仕事は、技能に属するので、資本はなかなか、まるごとこれを包摶できない。技術的土台のちがいが、労働が資本のもとにいる入り方のちがいを規定して、そういう廻り道をしながら生産関係がものを言つてゐる。だから学問や芸術の制作でも、物的な条件や技術が基礎的に重要になり、資本のものになりうる程度に応じて、次第に変質する傾向を帶びております」（一一一一二ページ）。

つづいて第五章「相対的剩余価値の論理」では、つぎのような所論が展開されている。——(一)資本主義も要するに私有財産制度の一形態だとする立場は「初期からのマルクスの基本的觀点」であるが、『資本論』では、この「基本的觀点」がつらぬかれたうえで資本主義社会の独自性がえぐりだされる、すなわち労働力も生産手段とともに商品として存在するこの特殊な私有財産制度のもとでは、人間の自然にたいする支配と、

財産の人間にたいする支配と——この両面をふくめての「搾取」——がいかに壮大な規模でおこなわれるかが明らかにされる。(二)マルクスが「絶対的剩余価値の生産」をさきにおき、「相対的剩余価値の生産」をあとにおいてるのは、一つには、絶対的剩余価値の生産という「野蛮な形態」が歴史的に先行するといふこともあるが、しかし彼は、資本主義社会での物質代謝過程がどうなっているかを大工業制度に即して分析することをねらいとしているのであって、相対的剩余価値の分析こそが彼の目標である、だからこそマルクスは、相対的剩余価値の生産にも財産の人間支配がふくまれていることを示すために、あらかじめ、「強制としての資本の性格」を端的にあらわす絶対的剩余価値の場合をとりあつかったのであり、だから問題はどこまでも「資本主義社会の物質代謝過程をおさえるための論理的手続き」にある。(三)マルクスの相対的剩余価値論では、資本制生産様式の発展が、まず人間の自然支配という觀点からポジティヴに、ついでそれが資本の価値増殖の生産力的姿態になつていてるという面からネガティヴにとらえなおされて、その第二の面では資本主義も私有財産制度として旧来のそれと変らぬ側面で、というよりもその

極限として把握されるが、しかしそのネガティヴな面の把握においても、旧来の社会にたいする資本主義社会の独立性——とくに機械制大工業による膨大な生産力の展開というボジティヴなもの——は片時といえども忘れられていない。

最後に第六章「資本と人間の再生産」では、マルクスの剩余価値論と資本蓄積論とが、同じ資本制生産過程の研究でありながら、どうちがっているか、また剩余価値論の研究は資本蓄積論の研究にどう生かされているかが考察される。つまり、剩余価値論と資本蓄積論との関連が問題にされるわけであるが、それについての著者の見解はつきのように約言できよう。——剩余価値論の場合と同様、資本蓄積論においても「歴史貫通的な事項をみる使用価値＝生産力視点」と「資本主義に独自な発現形態をみる価値＝生産関係視点」とがつながかれているが、剩余価値論では資本制生産関係（資本＝労働関係）の存在が前提されたうえで、その前提のもとでいかにして資本制生産がおこなわれるかが研究されたのにたいし、資本蓄積論では、そういう前提そのものが、同じ資本制生産のなかで生産過程じしんの結果としてどう再生産されるかが究明される。

ここで内田教授は二つの点に注意をうながしておられる。

第一に、資本の生産過程を——「使用価値＝生産力視点」からみた事実を捨象しきつて——価値増殖過程としてだけみて、同じ眼で資本蓄積論につなぐと「価値論→剩余価値論→

絶対的貧困という「資本論」像が生まれてきて、労働過程論＝相対的剩余価値論のところで検出された「生産諸要素の独自な結合のしかたから生れる生産諸力の高さ」が眼に入らなくなる、という点（むろん著者自身は「生産力視点の導入によるダイナミックな把握」を志向される）。第二に、経済学が「歴史の基礎」をとりあつかうものとすれば、資本＝貨労働関係の存在をたんなる「与件」としてではなく、経済法則そのものの結果として説明しなければならないのだが、マルクスは歴史をたんに「歴史の流れ」としてではなく、毎年毎年の再生産過程の累積としてみるとこの問題を解決する、という点。

なお著者は、「いかにして、貨幣が資本になる条件が——生産過程それ自体の中——再生産されるか」を、著者の考案による独自な図式にもとづいて説明しておられるが、この図式による説明はきわめて説得的である。

こうしてマルクス蓄論の核心的部分を紹介された著者は、さらにはすんで、「われわれが日常送っている生活が、資本蓄論の眼でみれば、どうみえてくるか」を問題にされる。

そしてそのプロセスで著者は、労働者の生活過程が労働力商品の生産過程として、工場の外部でも実際上、資本の再生産過程のうちに包みこまれている事情、つまり「我々人間の生活が資本の生活過程——むつかしい言葉でいえば資本の再生産過程——にふくみこまれていて」事情を、適切な具体例を織りませながら詳説しておられる。

#### 四

さて、この小文のはじめに一言しておいたように、内田教授は、初期マルクスから『資本論』のマルクスへの発展のあとを直接トレースするという手法はとっておられない。しかし本書では、初期マルクスと『資本論』のマルクスとの関連の問題が随所でとりあげられていて、「初期と後期のマルクスのあいだに何が貫いており何がふくらませられているか」の考察が重要なテーマの一つとなっている。そこで、つぎに、この問題についての教授の見解を見ておくことにしよう。

教授はまず、(1)人間の物質代謝過程を他の生物のそれから

区別する特殊人間的なものを明らかにし、かつ(2)この物質代謝過程が資本主義のもとでとる独自な形態をえぐりだそうとする観点——この「物質代謝過程把握」とでもいべき観点が、「初期マルクスの思考の凝縮点」であって、『経哲草稿』の基本視角をなしているとされる。そして、こうした視角は『ドイツ・イデオロギー』や『哲学の貧困』をへて『資本論』にもつらぬかれているものとされる。だが教授によれば、「ヨーロッパ資本主義の意外に強靭な生命力が、四八年の争乱に期待をかけたマルクスに、『ブルジョア社会が踏みこんだ』ように見えた新たな発展段階』について『全くはじめから』『新しい材料によって』研究をしなおさねばならぬと決意させた」(二四ページ)のであって、そのため初期マルクスと『資本論』のマルクスのあいだには「ある断絶」がみられることがある。この点を説いて教授はこう述べられる。

「資本主義も要するに財産の人に対する支配なんだというのと、同じ私有財産制度といつても独自なんだという、その二つの意味をこめて『前史の最後の』段階だとマルクスはいつているので、資本主義のネガティブな面とポジティブな面の両面がそれぞれ強く押し出された上で、『矛盾』として把握

されている。とくに、『資本論』のマルクスでは、……資本主義が歴史上もつポジティヴな意味があらゆる面で、全面的に鮮明に、具体的に、つかまれ——つかまることによつて始めて——『矛盾』が正に全面的に、鮮明に、具体的につかまれるので、同じ『前史の最後』の段階といつても初期のものとは全然ちがう。『前史の最後の段階』という同じ把握が、初期から後期にかけて——一方でつながっているが——その意味内容がかわっている。それが、資本主義の意外に強靭な生命力に何度も苦い目にあわされながら、また苦い目にあわされることに古典経済学との苦闘をつみ重ねながら出来上ってきた『資本論』の体系であるのです」（五一—五二ページ）。

初期マルクスと『資本論』のマルクスとの関連についての著者の右のような見解は、けだし卓見というべきであろう。ただ私は、『経哲草稿』には、著者の指摘される「物質代謝過程把握」という基本視角とならんで、もう一つのきわめて重要な視角があると考える。すなわち、さまざまな経済学的諸範疇の統一的な説明原理をうちたてようとする視角がそれである、

いま、この点にかんする私見をやや立ち入つて記しておこう。

『経哲草稿』でのマルクスは、「国民経済学」＝古典経済学の致命的欠陥を指摘して、こう主張する。——「国民経済学」にあっては、その根本前提である私有財産がただ自明の事実として前提されるにすぎず、その本質把握の問題が等閑に付されている、だから「国民経済学」では私有財産と利潤・地代・賃金・貨幣等々との必然的な関連が解明されないままに終つていて、すべてのものがたんに「外部的な諸事情」から説明されるにどまっている、と。そしてマルクス自身は、「いゝさいの国民経済学的諸範疇」の統一的な説明原理の樹立ということをもつて、みずからの基本的課題としたのであって、この課題遂行のための理論的横杆として着想されたものが、ほかならぬ「疎外された労働」の概念だつたといつてよい。

ところで、マルクスの「疎外された労働」概念には、(一)労働生産物の労働者からの疎外、(二)労働＝生産過程そのものにおける疎外、および(三)「人間の人間からの疎外」という三つの規定が内蔵されているが、このようなものとしての「疎外」

された労働」の概念は、ブルジョア社会における「眼前の事実」——労働者は富をより多く生産すればするほど自身はいつそう貧しくなるという事実、労働者はより強く労働すればするほど彼自身はますます無力になるという事実から、抽出され抽象されたものにはならない。そして、こうした事実そのものは、すでに「国民経済学者」たち——スミス、リカード、シスモンディら——によつて多かれ少なかれ指摘されていた。だがマルクスは、ブルジョア社会の現実分析を行うじて「疎外された労働」の概念を抽出・定立したばかりでなく、さらにこの概念を基礎として私有財産の本質把握に立ちむかひ、私有財産が「疎外された労働」の「產物」——「必然的帰結」にほかなることを明らかにしたのであつた。しかも彼は、さらにはすんで、ブルジョア社会のさまざまなかテゴリーの批判的再検討をおこない、そのことをつうじて資本・地代・利潤・賃金・貨幣などのカテゴリーが、いずれも私有財産——「疎外された労働」の「一定の発展した表現」にすぎないことを示したのである。

このように、『経哲草稿』におけるマルクスは、「いつさいの国民経済学の諸範疇」の統一的な説明原理を「疎外され

た労働」の概念に求めたのであり、そして彼は、私有財産——「疎外された労働」と利潤・賃金・貨幣・地代等々との必然的な関連を探究することによって、資本主義社会の内的構造の把握にするべく迫つていたのであつた。そしてこの点に、『草稿』における「疎外された労働」論の経済学的意義の一つか——しかも決定的な——があると、うべきであろう。

要するに、『経哲草稿』には「物質代謝過程把握」という

基本視角のほかに、「いっさいの国民経済学的諸範疇」の統一的な説明原理をうちたてようとするもう一つの基本視角が存在するのであって、このあとの視角もまた、初期マルクスと『資本論』のマルクスとのあいだをつらぬくものといつてよい。ただし『草稿』においては、もっぱら「疎外された労働」が前面に押しだされていて、まだ価値概念は見あたらない。

この「労働」概念から「価値」概念への移行がおこなわれて労働時間による価値規定がはじめて理論展開の基礎にすえられるのは『哲学の貧困』（一八四七年）においてである。<sup>\*</sup> そして『資本論』では、その後の長年にわたる思索と研究をつうじて、価値法則じしんがより科学的なもの——社会的必要労働時間による価値規定——に仕上げられるとともに、かか

るものとしての価値法則にもとづいて資本と賃労働との交換の問題、平均利潤率の問題、差額地代と絶対地代の問題、等々の難問が理論的に解決されることになる。そして、まさにそのことによってマルクスは、あらゆる経済学的諸範疇とブルジョア社会の三大階級の社会的・敵対的地位とを、価値法則という統一的な説明原理を基礎として真に科学的に解明したのである（ここでわれわれは、例の有名なクーゲルマンの手紙のなかでマルクスが、「どのようにして価値法則がつらぬかれるかを展開すること——これこそが科学です」と書いていることを想起すべきである）。

\* 私見によれば、この「労働」概念から「価値」概念への移行は、スマス投下労働説への積極的な評価をつうじて、はやくも『聖家族』（一八四五年）において開始されている。なお、この点については拙稿『ブルジョア経済学の批判者マルクス』（大河内一男編『経済学を築いた人々』一六七—一六八ページ）を参照されたい。

このように『資本論』には、「いつさいの国民経済学的諸範疇」の統一的な説明原理をうちたてようとする初期マルクスの視角が——「疎外され労働」概念から社会的必要労働時間による価値規定への進展をともないながら——つらぬ

かれているのだが、この点を内田教授は、「初期と後期のマルクスのあいだに何が貫いており何がふくらませられているか」を問題にされるにあたって十分に評価されていないようと思われるるのである。

それはともあれ、本書『資本論の世界』は、「人間の学問」の立場にたつ著者が、「人間にとって資本主義は何を意味するか」、またこの問題を解くうえで「経済学」という学問は、いったい、いかにして、いかなる意味を持ちうるのであろうか」を追求したものとして、多くの鋭い考察や斬新かつ有益な指摘で満たされている。それはまた、「スマスの世界」と「マルクスの世界」との双方に通曉した著者の手になるものとして、平明な表現のなかにもユニークな主張や見解が盛りこまれている、きわめて密度のたかい書物というべきであろう。